

2021年12月12日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 56 : 1～8

ルカによる福音書 19 : 45～48

「祈りの家」

<涙と怒り>

今日の聖書箇所冒頭では、「それから、イエスは神殿の境内に入り」とありました。神殿とは、エルサレムにある、ユダヤ人たちの礼拝の中心地、エルサレム神殿のことです。

イエスさまは、これまでエルサレムへの旅を続けてこられました。今日の所では、すでに目的地であるエルサレムに入り、その中心であるエルサレム神殿におられるのです。

イエスさまがエルサレムへとやって来られたのには、はっきりとした目的がありました。

それは、エルサレムで十字架に架けられ、すべての人の罪をご自分の身に背負って、贖いを成し遂げるため。そして、すべての人に罪の赦しを得させるためです。そして、復活し、天に上げられ、すべての人を、永遠の命と復活へと招くためです。そうして、神さまの救いの御業を実現するために、イエスさまはエルサレムへ来られました。

イエスさまは、神の御子であり、神さまが遣わされた救い主です。このことは、旧約聖書の時代から、神さまがイスラエルの民に預言し、ご計画しておられたことでした。

そしてイエスさまは、神さまとすべての人との間に、平和をもたらす王として来られました。力で他国を押さえつけるような、戦争に勝利する王ではなく、ご自分の命を与えることによって平和をもたらす、柔和な王として、子ろばに乗って来られました。

しかし、神の民であるエルサレムの人々は、この方が救い主であること、まことの平和をもたらす王であることを受け入れられません。神さまの救いを実現して下さる方が、今、訪れておられるのに。遠い昔に預言者が告げた、待ちに待った救い主が来られたのに。大いなる喜びの時が訪れているのに。誰もふさわしくこの方をお迎えすることが出来ないのです。

それで、前回イエスさまは、エルサレムのために涙を流された、とありました。

今、イエスさまによって、神さまから、平和への道が整えられ、差し出され、招かれているのに、それが目の前にあることを、誰も理解しようとしなからずです。

そうして、神さまが与えようとしておられる救いの恵みを受け取ろうとせず、人々が自ら滅びへと向かっているからです。そのことを、イエスさまは涙するほどに悲まれたのです。

そして今日の所で、今度は、イエスさまは怒りを顕わにされています。

それは、まさに先ほど涙を流された、平和への道をわきまえない人々の具体的な姿や態度

をご覧になって、怒っておられるのです。

神さまの救いの御心を知ろうとしない人々。神さまの救いを受け取ろうとしない人々。その、神さまの方へと向いていない、まことに自分勝手な人々の心が、神さまを礼拝するための神殿で、その罪の姿をさらけ出していたからです。

それは、どのような姿だったのでしょうか。

<神殿の境内での商売>

45 節には「それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて」とあります。

今日の出来事は、新約聖書の四つのすべての福音書で語られていて、「宮清め」の出来事として有名です。でも、それぞれ強調しているところに違いがあるようです。

ルカによる福音書では、あまり激しい怒りは伝わらないかも知れませんが、マルコによる福音書では、こうあります。「イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。また、境内を通過して物を運ぶこともお許しにならなかった。」(11:15~16) 追い出し、ひっくり返し、許さなかった。乱暴とも言えるほどの、イエスさまの激しい怒りの様子が記されているのです。

さて、ルカでは、イエスさまは商売をしていた人々を追い出し始めた、とありましたが、この神殿の境内での商売というのは、一体何でしょうか。

まず一つには、神殿に礼拝に来た人が献げる献金のために、普段使っている一般のコインを、神殿で献げる専用のコインに替える商売があったようです。

また他には、遠方から来た者のために、犠牲にするための動物を売る商売がありました。神さまに献げる犠牲は、傷のない動物でなければなりません。でも、遠くの国から、自分で動物に傷をつけずに持ってくるのは大変なので、境内で、傷が無いことを既にチェックされた動物が売られていたのです。

これらは、人々が守らなければならない、神殿での礼拝や献げ物の様々な注意事項を、面倒な手続き無しに、すぐにクリアできるように、便宜を図るための商売でした。

しかしイエスさまは、単にコインがふさわしいものであれば良いのではない。単に傷の無い動物を献げれば良いのではない。礼拝の細々としたことが、規定通りに守られていることが、神さまに喜ばれる礼拝なのではない。そこに、本当に神さまの御前に立って、悔い改めて、心から救いを求める祈りがなければ、それはまことの礼拝ではないのだ。いつも、神さまのことを真剣に思う心がなければ、神殿に来た時に、規定通り、何の落ち度もない犠牲や礼拝を献げたとしても、それは形だけのものでしかないのだ、ということを示されたのです。

<祈りの家>

それは特に、46 節でイエスさまが人々に言われた言葉に表されています。

「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』」

これは、今日読まれた旧約聖書の、イザヤ書 56：1～8 からの引用です。イザヤ書のこの箇所は、特に異邦人の救いについて語られている箇所です。

56：3 にはこうあります。「主のもとに集って来た異邦人は言うな／主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな／見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。」

異邦人は、ユダヤ人、つまり神の民ではない人々であり、彼らは救いには与れないと考えられていました。

さらに宦官は、外国の宮廷に仕える男性で、身分の高い女性と過ちがないように去勢された人のことです。つまり、宦官は、改宗してユダヤ人になりたくても、割礼を受けることが出来ないのです。ですから、どうひっくり返っても神の民に加わることが出来ない人たちであり、宦官は救いに与りようがない、と考えられていたのです。

しかし、御言葉を通して神さまは語られました。少し長いですが、もう一度 56：4～8 をお読みします。

「なぜなら、主はこう言われる／宦官が、わたしの安息日を常に守り／わたしの望むことを選び／わたしの契約を固く守るなら わたしは彼らのために、とこしえの名を与え／息子、娘を持つにまさる記念の名を／わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。また、主のもとに集って来た異邦人が／主に仕え、主の名を愛し、その僕となり／安息日を守り、それを汚すことなく／わたしの契約を固く守るなら わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き／わたしの祈りの家の喜びの祝いに／連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら／わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。追い散らされたイスラエルを集める方／主なる神は言われる／既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。」

つまり、割礼が出来なくても、異邦人であっても、神さまは、安息日を常に守り、神さまの望むことを選び、神さまの契約を守るなら、救いを与える。祈りの家に、神さまとの交わりの中に、その者たちも加えて、集める。そう言うておられるのです。

神さまがご覧になるのは、民族がどうか、割礼があるかないかではありません。

安息日を守ること。つまり、日々の生活を、神さまの礼拝を中心にして歩むことです。そして、神さまが望まれることを選ぶこと。神さまを愛し、隣人を自分のように愛して歩むことです。そして、契約を守ること。神さまのみを、まことの神として歩むということです。

そうして、神さまの救いを求め、交わりを求め、神さまに従って歩むことを望むならば。その人の歩みが、神さまの方向へ向かっているならば。神さまは、どのような者でも、異邦人でも、宦官でも、罪人でも、喜んでご自分の許に受け入れて下さる、と仰っているのです。

神さまが見つめておられるのは、神さまの御前に立つ人の心です。その人の歩みが、思いや、心や、行ないのすべてが、神さまへと向かっているかが大切なのです。

<強盗の巣>

しかし、イエスさまは、神殿に来ている人々は、そのように、祈りの家に集められるにふさわしい人々ではない、と言われます。「ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」

今、このエルサレム神殿で商売をし、またその商売で便宜を図ってもらって礼拝をささげている人たちは、強盗のようなものだ、と仰ったのです。厳しいお言葉です。

この、「強盗の巣にした」というところも、旧約聖書からの引用です。それは、エレミヤ書 7:11 です。こうあります。

「わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。」

エレミヤを通して神さまがイスラエルの民に忠告された御言葉です。当時のイスラエルの人々は、エルサレム神殿を大変重んじ、熱心に礼拝をしていました。しかし、いつしかそれが、律法通りに神殿の礼拝を守ってさえいれば、どんな罪も赦される、という、自分に都合の良い、まことに自分勝手な解釈に陥っていったのです。

確かに、神殿で動物の犠牲を献げるのは、自分の罪を贖い、神さまに赦しをいただくためです。でも次第に、イスラエルの人々は、どんな悪事を行なっても、ちゃんと神殿で犠牲を献げさえすれば罪は赦されるのだから、何をしてもいいのだ、と行ってしまったのです。

エレミヤ書の 7:8~には、そのような思いで、神殿で「救われた」と言っている人々に向かって、こう語られています。

「しかし見よ、お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力を持たない。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。」

神さまが人々に求めておられるのは、人々が心から罪を悔い改め、心から神さまに従うことです。日々、神さまが望まれるように生き、日々、神さまの御前に正しく歩むことです。

しかし、人々は、神殿に来ない日には、盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった今日の神々に従っているのです。神さまの御心にことごとく背いている。そして、神殿に来た時だけ、神さまを礼拝し、犠牲をささげ、「救われた」と言っている。心から悔い改めの祈りをささげている者は一人もいない。それなら、ただの強盗の集まりではないか。神さまは、そう非難しておられるのです。

<殺意へ>

強盗の集まりと言われた人々。これが、神さまの御言葉に、真剣に耳を傾けない者の姿です。神さまの御心を知ろうとしない者の姿です。神さまにではなく、自分の欲望に忠実な、

自分勝手な者の姿。神さまのご支配に従うのではなく、自分が王のように振る舞い、自分の思いのままに生きようとする、人間の罪の姿です。

…ルカによる福音書に戻りますと、19：47～48では、その罪が極まって、人々はイエスさまに殺意を抱くようになります。

「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」

祭司長、律法学者、民の指導者たちは、とうとう神さまの思いを受け入れず、忠告にも耳を貸さず、自分の思いを貫こうとし、神の御子イエスさまを殺そうとするのです。

神を、まことの神としない。神さまの御心ではなく、自分の心に従う。この人間の罪が、イエスさまを十字架へと追いやるのです。

そして、わたしたちの中にも、この人々の罪の姿は、あるのです。わたしたちは、この神殿の人々を、殺意を抱いた指導者たちを、愚かな人々だ、不信仰な、罪深い人々だ、と眺めている訳にはいきません。

わたしたちもまた、主の日の礼拝を守りながら、日々の中で、神さまの恵みを忘れるなら。神さまに寄り頼むことをしないなら。隣人を愛そうとしないなら。神さまが望むことを選ばないなら。すべての時、すべての場所で、心を神さまに向けていないなら。イエスさまが怒りを顕わにされた人々と、同じことをしているのです。

<平和への道をわきまえる>

神さまは、わたしたちの罪を指摘し、それを正しく裁かれるお方です。神さまに背いたこと、裏切ったこと、神さまの恵みの御手を無視し、振り払ったことに、激しく怒られるお方です。しかし、神さまはそれ以上に、ご自分がお造りになったすべての人々を、心から愛し、深く憐れまれるお方なのです。それゆえに、神さまは、人々が罪によって滅びることを良しとされませんでした。そのためにこそ、ご自分の愛する御子イエスさまを、救い主としてこの世にお遣わし下さいました。

そして、御子イエスさまもまた、滅びに向かう人々のために涙を流し、祈りの家を強盗の巣にした人々に、怒りを顕わにされました。

しかしイエスさまは、これらの人々が、そしてわたしたちが、この罪を赦されるために。滅びから救われるために。神さまに向かって生きる者となるために。わたしたちのすべての罪を背負って、十字架の苦しみの道を、死に至るまで、歩み通して下さるのです。

ルカによる福音書 23：38には、十字架に架けられたイエスさまの祈りの言葉が語られています。イエスさまは、こう祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」わたしたちは、このイエスさまの祈りに、ひたすら支えられ、赦され、生かされているのです。

ですから、イエスさまは、わたしたちに平和への道をわきまえることを、求めておられます。神の訪れをわきまえることを、求めておられます。

それは、わたしたちのために来てくださったイエスさまを。神さまがわたしたちを救うために遣わして下さったイエスさまを。救い主と信じ、心から受け入れることです。神さまの救いの恵みを、罪の赦しを、受け取ることです。

そして、神さまと共に、神さまに助けられ、守られ、導かれて、歩いていくことです。

わたしたちは、心を神さまに向けることも、神さまに立ち帰ることも、神さまに従って歩むことも、神さまの助けなしにはすることが出来ません。わたしたちは、とても弱いのです。自分の決心や、覚悟や、自分の力に頼る忍耐は、何の役にも立ちません。

わたしたちは、イエスさまに祈られ、十字架によって罪を赦され、復活の命に結ばれてこそ、神さまの御許で生きる者となることができ、神さまが望まれる歩みをしていくことが出来るようになるのです。

平和の王であるイエスさまの許にあって、わたしたちの歩みのすべてが、神さまの御前で、真実なものとなされますように。心も、思いも、体も、行ないも、主の日の礼拝も、日々の生活も、すべてが、神さまのものとされますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、御言葉を聞きながら、祈りをささげながら、礼拝を守りながら、しかし、自分のすべてをあなたに明け渡すことが出来ず、委ねることが出来ず、自分の思いに捉われている者です。どうか、このようなわたしたちの罪の歩みをお赦し下さい。

そして、真実な心と、まことの悔い改めをもって、御前に立ち、祈る者とならせて下さい。

イエスさまがわたしたちのところへ来て下さったことを覚えて、アドベントの日々を歩んでいます。どうか、驚きと喜びと感謝を持って、救い主イエスさまを、平和の王であるイエスさまを、受け入れる者とならせて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン